

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 84

2021年6月

Special to the Newsletter

5月5日は何の日？

山田 政信

日本で5月5日といえば端午の節句だが、ポルトガル語を公用語とする国々では「世界ポルトガル語デー (Dia Mundial da Língua Portuguesa)」という記念日である。これは、2009年にカーボヴェルデで行われたポルトガル語圏諸国共同体 (Comunidade dos Países de Língua Portuguesa、以下 CPLP) の定例総会で定められた「ポルトガル語と文化の日 (Dia da Língua Portuguesa e da Cultura)」が、ユネスコによって2019年に制定されたもので、比較的新しい記念日といえる。

CPLPは、アンゴラ、ブラジル、カーボヴェルデ、ギニアビサウ、赤道ギニア、モザンビーク、ポルトガル、サントメ・プリンシペ、東ティモールの9か国からなり、世界のポルトガル語話者は約2億5千万人とみられている。しかし、ブラジルの人口が2億人を数えることから、ブラジル人がそのほとんどを占めていることがわかる。移民受け入れ国だったブラジルは1990年代には移民送出国となり、たくさんのブラジル人が外国に移住している。現在では、北米（主としてアメリカ合衆国に移住しており、総数約150万人）、ヨーロッパ（イギリス、ポルトガル、スペイン、ドイツ、スイス、イタリア、フランスなどに約75万人）、アジア（日本が主たる移住地で総数約19万人）に拡散している。それらの国や地域でも移住した人々の多くはポルトガル語を日常的に使っており、子弟に対する継承語としてのポルトガル語教育に関心が寄せられるようになっている。

世界ポルトガル語デーの制定に先んじて、ブラジルでは11月5日が「ポルトガル語ナショナルデー (Dia Nacional da Língua Portuguesa)」、ポルトガルでは6月10日が「ポルトガル語の日 (Dia da Língua Portuguesa)」と定められている。前者はブラジル文学アカデミーの創設者の一人で2代目理事である政治家フィ・バルボーザの誕生日、後者はポルトガル史上最大の詩人とされるカモンイスが逝去した日付に当たる。では、なぜ5月5日が世界ポルトガル語デーなのか。どうやらCPLPの文化大臣らが最初の会合を行ったのがこの日だったからなのである。なにか特別な理由付けがあるのではと考えていたが、強いて言えば文化的というより政治的ということになる。

この新しい記念日の制定そのものが2年前だったからと言ってしまえば言い訳になるが、筆

者がこの日を知ったのはつい先日である。ポルトガル語教育に関わる者としていささかお粗末な話しであることを自覚しつつ、自戒を踏まえて以下続けたい。

今回の情報を得たのは、昨年からWEB会議システムを日常的に使うようになり、いろいろな国に住む人々と関わるることができたことによる。外国の学会や研究教育者大会の情報がこれまで以上に得られるようになったが、そのなかでも語学教育の研究者や教育者からの情報が多いように感じる。筆者の専門である宗教学や移民研究、またラテンアメリカ研究の学会でもWEB会議システムを使った研究会や大会を行っているが、それよりも活発な印象がある。語学教育分野はWEB会議システムの第一義であるコミュニケーションツールという機能と親和性が高いがゆえに積極的に利用されるということなのかもしれないが、そもそもグローバルに拡散したブラジル人研究者・教育者がこのシステムを活用して積極的に繋がろうとしていることが一番の理由かもしれない。いや、ひょっとしたらサウダージ（郷愁）をこよなく大切にするブラジル人氣質の現れなのか。

この一年で、筆者は、ブラジル、コロンビア、フランス、ルーマニアの大学でポルトガル語の授業をしたり、教育研究者の大会で発表者やコメンテーターとして呼んでいただいたりした。これらの機会を通じて語学教育の教育者や研究者といった知己を数人得ることができ、活動の場が広がったように感じている。興味深いところでは、「漫才で覚える日本語」というポルトガルの大学のワークショップに参加したが、それは現在、筆者が吉本芸人らと進めている「漫才で覚える〇〇語」の共同プロジェクトの一環である。

コロナ禍は人の移動や経済活動を滞らせ、これまでのグローバリゼーションの流れに掉さしたことは否めない。しかし、その一方でWEB会議システムの利用を加速化させ、先例にない形で個々人の繋がりを地理的空間に関わりなく、しかも急速に束ねるようになった。演出家宮本亜門氏の発案による「上を向いてプロジェクト」はまさに好例である。あらためて言うまでもないが、飛行機に乗って海外出張することなくグローバルな関わりができるようになったことは新たな可能性の開花である。学生のWEB留学も考えたいものである。

個々人が結び目（nodes）として他者と繋がり（ties）、その連鎖が新たな社会的ネットワークとして立ち上がる。サイバー空間に紡がれる繋がりには地理的空間に左右されない結び目を包摂するネットワークとなり、個々人に新しいアイデアや機会を与えてくれる。それは、普段は緊密でなく緩やかだが、開かれたネットワークとして機能する。前近代や近代に特徴的である閉鎖的なネットワークでは得られにくい機能である。これをコミュニティの発露と見做すかどうかは、そこにメンバー間の信頼や互酬性が生まれているかどうかで判断できるだろう。しかし、少なくともマーク・グラノヴェッターがいう「弱い紐帯の強み」という特徴が見て取れそうである。

ここで、世界ポルトガル語デーにちなんで開催されたイベントの一つを紹介したい。ブラジルは、ヨーロッパ（3か所）、アフリカ（6）、中東（4）、アメリカス（13）の国の大使館に外郭機関としてブラジル文化センター（Centro Cultural Brasileiro、以下CCB）を併設させており、ここで紹介するのはイタリア（在ローマ）とルーマニア（在クルジュ・ナポカ、パベシュ・ボリアイ大学内）にある二つのCCBが共催したイベントである。ちなみに、CCBでは主にポルトガル

語の普及と教育活動が行われており、展示会、コンサート、セミナー、講演会など、ブラジル文化の普及を目的とした取り組みがなされている。

イベントの広報宣伝はフェイスブックで行われた。FBのページには、開催日：2021年5月5日（水曜日）、開始時刻：イタリア（19時）、ルーマニア（20時）、ブラジル（14時）、と書かれている。いかにもグローバルな時間設定である。司会はイタリアとルーマニアのそれぞれのCCBでポルトガル語を教える教員で、ルーマニア人女性とブラジル人男性による歌の饗宴があった。

まず、イタリア側の司会者が、開口一番、パンデミックは今回のイベント開催という良い事ももたらしてくれたと述べたことが印象的だった。ブラジルのバイア州サウバドール市から出演したブラジル人男性は、ブラジルのポピュラーミュージックであるMPB（Música Popular Brasileira）を歌い、ルーマニア人女性は透き通った高音の美声でポルトガルのショーロとブラジルのボサノバを披露してくれた。彼女はバベシュ・ボリアイ大学でポルトガル語教育に従事するスタッフで、筆者が同大学でZoom授業を担当した時には、見事なブラジルポルトガル語で通訳してくれたのだが、ブラジルに一度も行ったことがないと言って筆者を驚かせた。外国語の運用能力を高めるだけなら、留学という名のもとで物理的に国境を移動することは必ずしも必要ないということなのだろう。

なお、ポルトガルにはカモンイス言語・国際協力機構（Camões - Instituto da Cooperação e da Língua）があり、ポルトガル語とポルトガル文化を促進する機関としてCCBよりもはるかに多くの拠点を世界の主要な都市に構えている。あくまでもホームページで得た情報だが、同機構では今年50か国以上の拠点で、世界ポルトガル語デーを記念する、討論会、コンサート、朗読、映画会などを行ったという。

実は、ポルトガルとブラジルで話されるポルトガル語には音韻面でかなりの違いがあり、ヨーロッパのポルトガル語とブラジルポルトガル語というように呼ばれている。スペイン語も国や地域によって発音に違いはあるが、スペイン王立アカデミーによって18世紀には統一したスペイン語の正書法が定められている。しかし、ポルトガル語の場合、リスボン科学アカデミーとブラジル文学アカデミーが両国共通のスペルを確立するための最初の合意を行ったのは1931年のことである。その後、何度か正書法の修正が試みられ、ようやく2009年1月1日に現行のポルトガル語正書法が発効した。まさにその年、のちに「世界ポルトガル語デー」となる「ポルトガル語と文化の日」がCPLPで定められたのだった。

さて、本年度から筆者はアメリカス学会の会長をお引き受けすることになりました。力不足を自覚しつつも、5月5日のこどもの日にちなみ、初心に帰って心機一転。アメリカス地域に地歩を固めつつ他の地域や国をも涉猟し、本学会の活動がさらに充実するよう尽力したいと思っております。会員の皆様のお力添えを心からお願い申し上げます。

（やまだ・まさのぶ／天理大学国際学部教授）

Scenery

文学の中のアメリカ生活誌 (75)

新井 正一郎

The Boss Tweed (ボス・トゥイード) political boss 「政治ボス」という言葉は 1850 年代から使われていたが、この言葉が広く人々の口に上ったのはボス・トゥイードことウィリアム・M・トゥイード (1823 - 78) のせいだ。ボス・トゥイードとは 1850 年代後半からニューヨーク市の民主党系政治団体 Tammany Hall 「タマニーホール」で役職を利用して市政を牛耳った最も悪名の高い市のボスである。もともとタマニーホールという単語は、18 世紀の勇敢なデラウェア・インディアンの酋長の名からきている。当初は 1789 年にニューヨークのナッソー通りにできた愛国主義の協会を指して使われていたが、19 世紀になると別の意味になり、民主党の地方組織となった。

トゥイードは不動産で財を成した人で、1850 年のニューヨーク市長選挙で初出馬したが、この時は落選した。しかし、ジャガイモの大凶作で、ドイツやアイルランドからの移民が家族とともに急速にニューヨークに押し寄せてきた 1853 年の市長選挙では、彼の傘下にあったアイルランド系与太者集団のボスが多くのアイルランド人移住民や現地生まれの貧者の票集めや党献金をしたことによって勝利した。彼はそのお礼として、住居や肉体労働の仕事を彼等に世話をし、政治的力を強めていった。1868 年から民主党の総裁になると、同市の重要職は裁判所判事であれ、市の会計監査官であれ、収入役であれ、彼一人で決めるほどの実力を発揮し、自分とその一味に十分な報酬が転がりこむ法案を成立させていた。1869 年にはトゥイード一味がニューヨーク市の財政から奪った金額は 3 億ドルと推定される。

しかし 1870 年代になると、改革者が立ち上がった。民主党の改革に燃えるリーダーや風刺漫画家トマス・ナストや市民意識に目覚めた人たちはトゥイード一味の一扫を決意した。トゥイードはいろいろな手を使って抵抗するが、1873 年に逮捕された。その後彼は脱走してスペイン、キューバに亡命した。が、ついにつかまり、送還され、1878 年にニューヨークの刑務所で亡くなった。

「金メッキ時代」と呼ばれる 1870 年代と 1880 年代のアメリカの都市の多くは、このような巧みに仕組まれた政党の黒幕の網にかけられていた。ジャーナリストのリンカン・ステファンズの『諸都市の恥』は、そのような例としてフィラデルフィア、ピッツバーグ、シンシナティ、シカゴ、セントルイス、ミネアポリス、サンフランシスコ、ニューオーリンズをあげている。当時の作家の間でもアメリカの都市の腐敗を非難することが多くなった。ウォルト・ホイットマンの『草の葉』(1855) は 1850 年代の活気あるニューヨークを紹介しているが、のちの『民主主義の展望』(1871) は「魂の抜けている」都市としてトゥイード支配のニューヨークを描写している。

The Roaring 1920s (浮かれ 1920 年代) ヨーロッパで第一次大戦が開始されたのは、1914 年 7 月のことであるが、アメリカが参戦したのは 1917 年 4 月であり、1 年半後の 1918 年に休戦を迎える。この頃、大きな話題になったものがある。1918 年の秋、アメリカを襲った influenza 「流行性感冒」である (influenza はイタリア語で、不運がふりかからないことを指す言葉として使われる)。スペインから流行しだしたので、Spanish flu 「スペイン風邪」と呼ばれ、pandemic (世界的大流行) をみた。首都ワシントン以外の主な衛生局はこの風邪の猛威に全く無力で、秋までにアメリカの人口の 3 分の 1 (54 万 8,000 人) が亡くなった。だが生き残った人々は復興への機運を盛り上げ、

1920年代の未曾有の経済的復興の契機となった。つまりピューリタン精神を支えにして、蓄積や生産に携わっていたアメリカは、1920年代の産業集中を経験した後、消費・宣伝志向の社会に変わり始めた。国勢調査の数字はその一部を物語る。すなわち1920年にはアメリカの非農家は1,768万8,000人であったが、1930年には2,326万6,000人に増え、1920年に679万戸であった農家は672万戸に減った。

この新しい方向を示すのが自動車産業だ。ヘンリー・フォードは新車の生産にあたって、流れ作業方式の使用に成功したため、自動車の価格は大きく下がり、国内の中産階級（郊外住民）だけでなく、多くの農民も月賦制度を利用して自動車を購入できるようになった。自動車は都市型社会に支えられた新しい暮らし方を人々に約束させる商品であった。これがこの時代の新商品—自動車、合成繊維、家電製品、郊外住宅、高層建築などに熱狂的な消費が起きた原因である。

消費社会における新しい重要性をもったものに、通信販売会社がある。1853年にシカゴの時計業者アルバー・ローバックと共同出資でつくったリチャード・シアーズの目的は、通販で都会の店に簡単に行けない農村の顧客に商品を提供することであった。これは農村のアメリカ人の新しい消費社会をつくりだすことを意味した。周知のように、通販の成否は宣伝、扱われる商品についての高い信頼度にかかっている。経営戦略において勝っていたシアーズ社は、タイプライターが一般に用いられるようになって、農村の顧客が没個性的な手紙を受け取っていやな感じを抱かないように手書きのものを送った。またシアーズ社の商いは、当時のいかさま商人がよく用いた手口と違い、「お気にいらなければ、代金はお返します」といった誠実さを売り物にしたので、ノースダコタ州にある街の人々は、シアーズ・ローバック会社のカタログに一層親しんで生活するようになると、会社名を拝借して、Seroco（セロコ）という町名をシアーズに変えたほどであった。シアーズの消費社会が大きく成長した後も、会社は消費者の友人であることを顧客に確信させた。このようなやり方でシアーズ社は売り上げを伸ばし続け、1906年の同社には毎日受け取る文を処理する従業員が2,000人いた。ほどなく郵政省や鉄道局や電話局、シアーズの本店が位置するシカゴに支店を置くようになった。シアーズはカタログに異常な情熱を燃やした人でもあった。彼にとってカタログは商品陳列場であり、セールスマンであった。

時代の前夜で一次大戦が終わると、戦争にうんざりしていた都会の若い世代の人々は、鬱積していた感情を爆発させ、しばらくの安定の時代の繁栄に浸っていた。彼らは貧困者も金持ちも、明日はもっと多くの収入があると思うので、今日の消費を気にしないようだった。彼らが信じるのは馬鹿騒ぎの未来だ。彼らは映画や映画の虚実を混ぜた噂話で賑う新聞、もぐり酒場、ジャズ、ダンスといった新しい文化に強く反応し、騒ぎまわっていた。スコット・フィッツジェラルドの『偉大なギャツビー』（1925）は、こうした大都市固有の文化に支配された農村出の貧しい若者の軌跡を描いたものだ。隣人ニックの視点で語られる主人公のギャツビーは、金の絶対力を信じている男である。彼はデイジーとの出会いをオランダの入植者が見た（正夢花のような一叢林）に重ねるのだ。そして彼女が現れることを期待して毎晩豪華なパーティを繰り広げる。またその想いを現実のものとするべく、館をオランダの入植者たちが目にした正夢、つまり新世界の初々しい胸、消滅した叢林のあとに建てる。しかし彼は非業の死を遂げ、彼の夢は幻想に終わる。ある批評家が述べているように、この作品は語り手ニックが見たこの時代の魅惑と精神の醜悪さを描いたものだ。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

メキシコ大統領がマヤ人に歴史的謝罪 —カスタ戦争の終結—

初谷 譲次

5月3日（聖十字架の日）、メキシコ・キンタナロー州ティホスコ村のカスタ戦争博物館において、ロペス・オブラドル大統領がマヤの人びとに対して謝罪した、という驚くべきニュースが世界中を駆けめぐった。「マヤの人びとへの暴虐に対する謝罪—カスタ戦争の終結」と題されたセレモニーが開催され、同大統領は演説の冒頭に「征服、植民地支配の3世紀間、メキシコ独立後の2世紀にわたり、メキシコ内外の個人や官憲が犯してきた恐ろしい暴挙に対し、マヤの人びとに心からの謝罪を申しあげたい」と述べた。

マヤ文明は、高度な天文学や暦の知識を發展させ多数のピラミッド群を建設しながら、謎の滅亡を遂げた「神秘的」な文明というイメージが消費され続けている。しかし、最盛の古典期（200～1000年）の壮麗さはなかったとはいえ、16世紀のスペイン人による征服期にもマヤ文明は發展し続けていた。そして、現在でも800万人以上のマヤ人（ユカタン・マヤは100万人）が独自の文化を維持・發展させながら生活している。

このようにスペイン人による征服はマヤ人を絶滅させることはなかったが、今日に至るまで植民地およびポスト植民地支配のもとに置かれ、差別と抑圧とともに生きてきたことも確かである。



謝罪演説をするメキシコ大統領、ロゴマーク中央はカスタ戦争指導者ハシント・パット、着席女性はマヤ代表

メキシコ史においてヨーロッパ人による支配に対する抵抗の形態としてもっともわかりやすいものが先住民反乱である。「征服」から300年あまりも経た1847年に、ユカタン半島ではマヤ人の大反乱が勃発した。またたくまに反乱は半島全域にひろがり、半島の3分の2がマヤ反乱軍に制圧されてしまう。

同大統領が「当時の大部分の世論は、今では信じがたいことではあるが、先住民を殲滅せよという論調だった」と述べているように、政府軍も必死に反撃し、53年には反乱は一応鎮静化した。しかし、半島東部の森林地帯に逃れたマヤ人は、独自の「語る十字架」信仰と教会護衛システムを構築し執拗にゲリラ闘争をつづけた。拠点となったチャン・サンタ・クルスが最終的にメキシコ連邦政府軍に制圧されるのは、1901年のことであった。カスタ戦争の名で知られるこの反乱は、8万人ものインディオをまきこみ、最初の3年間に15万人もの戦死者を出したメキシコ史上最大・最長の先住民反乱である。

現在のキンタナロー州に居住するマヤの人びとは、4つの祭祀センターにおいて教会護衛システムを維持する反乱マヤ（クルソブ）の末裔である。今回のセレモニーの副題が「カスタ戦争の終結」となっているのはこのためである。大統領の演説は続く。「今日までメキシコ先住民は、搾取、略奪、抑圧、人種差別、排除、虐殺を受けてきた。なかでも、ヤキ人とマヤ人はもっとも恥ずべき最悪の扱いを受け最大の残虐行為の犠牲となった」と述べたうえで、「ポルフィリオ・ディアス独裁政権は34年間にわたり国を荒廃させ、1876年から1911年に国の内外の民間人のために先住民共同体から土地を奪い取った。当時の支配的イデオロギーは、先住民は国家の渴望する發展を達成するために土地、水、石油、森林を差し出し、自らはペオン（土地なし農民）として働けばよいのだ、というものである」と先住民を犠牲にして資本主義を確立・發展させ

たメキシコの19世紀自由主義体制を痛烈に批判している。演説は先住民が被ってきた抑圧の歴史を具体的に語ったうえで、「最後に、私たちは約束します。女性・男性みなさんに対し気配り、心配りをし、尊重いたします。しかし、それはもっとも必要な人びと、とりわけマヤの人びとやメキシコ文化を形成するすべての先住民の人びとに対し優先的に行います。私どもは、ここキンタナロー州および全国でそれを実行中でありませう」ときわめて抽象的な表現で結んでいる。

他方で、マヤ代表のアナ・カレン・ツビ・ポオト女史は、力強いマヤ語と正確なスペイン語のバイリンガルで演説し、この謝罪が口だけに終わることのないようにと釘をさし、大統領に対し3つの提案をしている。

「1つ、私たちの記憶に誇りを与え、私たちを集团的主体として認知し、私たちに正義を実行するために、マヤ人の記憶・認知・正義委員会を設立すること。

2つ、私たちの火急的の必要に対処し、私たちの正義と福祉の地平を構築するために、マヤ人の伝統的役職者*のリーダーシップのもとでマヤ人発展のための計画を作成すること。

3つ、今日まで私たちが受けてきた不正・排除・差別を二度と繰り返さないように、わが国の憲法と法律に現存する奪うことのできない私達の尊厳と権利を認知すること」。

アステカ帝国首都テノティティウラン創設(1325年頃)から700年、メキシコ征服(1521年)から500年、メキシコ独立(1821年)から200年の節目の年に開催されたマヤ先住民に対する国家の謝罪という、一見すると歴史的大事件が、内実を伴うものとなるかどうかはわからない。カスタ戦争のみをマヤ人抵抗のシンボルとしてその形式的終結宣言を問題解決とされてはたまらないからである。

また、歴史家は反乱というわかりやすい抵抗の形態にだけ目を奪われがちであるが、武装蜂起だ

けが抵抗ではない。カスタ戦争が終結しようがしまいが、マヤ人の生存への闘いは続いていくことだろう。とはいえ、国家が過去のあやまちを認め謝罪することが償いの第一歩ではあることは確かである。セレモニーの様子を伝えた動画サイトには大統領を絶賛する書き込みにあふれている。

* dignatarios mayas: カスタ戦争の末裔であるマヤ集団は現在でも4つの祭祀センターにおいて独自の十字架信仰と教会護衛システムを維持している。その役職者たち(482人、2019年)を指す。

(出典:2021年5月5日参照)

掲載写真: <https://3minutosinforma.com/chiapas-se-suma-a-peticion-de-perdon-por-agravirus-al-pueblo-maya-realizada-por-el-estado-mexicano/>

演説文: <https://www.gob.mx/presidencia/articulos/version-esteno-grafica-peticion-de-perdon-por-agravirus-al-pueblo-maya-fin-de-la-guerra-de-castas?idiom=es>

動画: <https://www.youtube.com/watch?v=YvOhFRF3mew>

YvOhFRF3mew

(天理大学国際学部教授)

お知らせとお願い

◇来る7月17日(土曜日)午後1時からZoomにて次回定例研究会を開催する予定です。詳細は6月末に本学会ホームページに掲載します。多数のご参加をお待ちしています。

◇学会誌『アメリカス研究』(電子ジャーナル)は本年も11月末に第26号の刊行をめざして準備を開始しております。ご投稿をお考えの会員諸氏におかれましては、投稿規定ならびに執筆要項を学会ウェブサイト上にて7月初旬にはご案内させていただく予定です。この機会に日頃のご研究成果をぜひともお寄せいただければ幸いです。

◇お願い

現在、会員のデータを整理しています。本学会事務局アドレス(tuaas@sta.tenri-u.ac.jp)に、ご氏名、ご所属、メールアドレスをお送りください。

上谷博先生を偲ぶ

天理大学アメリカス学会の創設に関わり、長年にわたり顧問として本学会を支えてくださった天理大学名誉教授上谷博先生が本年4月28日に83歳で逝去されました。先生は天理大学に1966年に助手として入職され、還暦を迎えられた1998年に教授を退職。その後も2008年まで非常勤講師として後人の育成に献身されました。天理大学の42年という永きに亘る教育研究活動と他大学での非常勤講師というお立場、そして月一度有志が集まって20年近く行われた「スペイン語研究会」によって、数えきれない学生や社会人が先生の薫陶を様々な形で受けてきました。

先生は、天理大学外国語学部イスパニア学科を卒業後、初の日本人国費留学生としてペルー・サンマルコス国立大学に留学されました。在学中はビクトル・アリトミ元駐日ペルー大使をはじめとする大学の校友らと将来のラテンアメリカの政治・経済・社会について熱く語られました。そのようにして現場で培われた先生のスペイン語力は比類ないものでしたし、ラテンアメリカの植民地期に始まる近代と帝国主義に対する批判の精神は晩年も変わることなく勢いがありました。

マルクス主義的な社会発展論と弁証法的な論理展開は先生の最も得意とする分野で、大学生の私にはなかなか理解できるものではありませんでした。今とは違ってラテンアメリカの情報は極めて限られ、想像力を逞しくして講義を聞くしかありませんでしたが、先生の迫力ある語りが大いに刺激され、その向こうにある何かを知りたいと思わせてくださるものでした。天理教の熱心な信仰者である先生は、天理教神学を語る上でもたとえば西田幾多郎の「絶対的矛盾の自己統一」の論理を引き合いにして、弁証法的に「心・身体」と「神」を語られ、哲学的に深く思索することを教えてくださいました。

ラテンアメリカ研究では、天理大学と先生が非常勤で教鞭を執られた大学の卒業生で研究者となった教え子たちが「21世紀ラテンアメリカ研究会」として集まり、研究成果を3冊の本として上梓しました。この研究会は約25年前に始まり、

現在も年に2回開催していますが、当初は関西だけでなく関東でも合宿を行いました。上谷先生を囲んだ夜の飲み会は楽しく議論沸騰。上谷節が流れはじめても、研究会というお堅いイメージではなく兄弟の繋がりのような雰囲気です。誰でも仲間として迎えてくださる上谷先生の包容力あるお人柄があったからこそと思います。

最後に、目を閉じれば浮かんでくる、飲み会のワンシーンを皆さんと共有して、先生の在りし日を偲ばせていただきます。それは、燻らせていたパイプを片手に握り、両手を大きく広げて胸を張り、眼鏡の奥の目を細くしながら、「まあ、ええやん。みんな、夢を見ようよ」と悠然と語られる先生の笑みをたたえたお顔です。ロマンチスト然とした先生の雄姿です。

上谷博先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。(山田)

山田新会長・野口副会長が就任

◇昨年11月28日に開催された第25回天理大学アメリカス学会年次大会の総会の席上、新会長に山田政信氏(元副会長・天理大学国際学部教授)が、副会長に野口茂氏(天理大学国際学部教授)が選出・承認され、即日着任した。山本匡史副会長は再任された。いずれも任期は3年。

編集後記

◇コロナニモマケズ、ソーシャルディスタンスニモマケヌ、北ニ新タナ事象アレバ、行ツテ参与観察シ、南ニ関心ヲモツ人アレバ、オモシロソウダカラ行ツテミロトイフ、ソウイフモノニ、ワタシハナリタイ。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 84 : 2021年6月17日発行)

発行者 : 山田政信

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学アメリカス学会

電話 : 0743-63-9076

Fax : 0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/>